

植物園の時代

札幌における花ある風景の出現は予想以上に古く、開拓初期の札幌農学校の創成期まで遡るものと考えられる。

植物園が出来る以前に、現在の時計台周辺にあった農学校の敷地の北側にあったとされる農校園から払い下げられた品物のリストが残されており、当時（明治十六年）にはすでにかなりの種類の草花が札幌で栽培されていたことが分かっている。

この中には、野菜や果物に混じって、ストック、シクラメン、ペゴニア、ペラルゴニウム、パピアナ、フクシア、ミムラス、カルセオリア、キンレンカ、ペチュニア、パンジーなど、現在でもなじみ深い植物の名が列記されており、まだ原野に掘っ立て小屋が並んでいたかも知れない時代に、華やかな花達が栽培されていたことは極めて興味深いものがある。

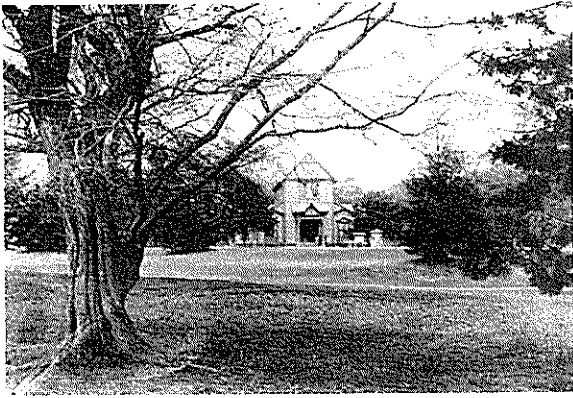
その後、現在の植物園の整備が進み、温室や様々な花壇等が充実するにつれ、札幌の花文化のセンターとして永きにわたって植物園がその役目を果たしてきた。農学校―北大は、市民の間に極めて身近な存在として受け入れられていたことは周知の通りであるが、その中で市民に門戸を大きく広げていた植物園を中心に、バラ、洋ラン、菊、山草など多くの植物同好会が盛んに活動してきた事実は、北国の花文化の発達に大きく貢献した植物園の役割の大きさを示すものであろう。

しかし、植物園を舞台に植物同好の士が活発な活動を行っていても、それはあくまで個人的なレベルであり、植物園を通じて導入された植物が市民の間に広まっていったとしても（例えばライラックのように）、まだ公共的な場所にまで花が広がっていくには多少の時間を要したのである。

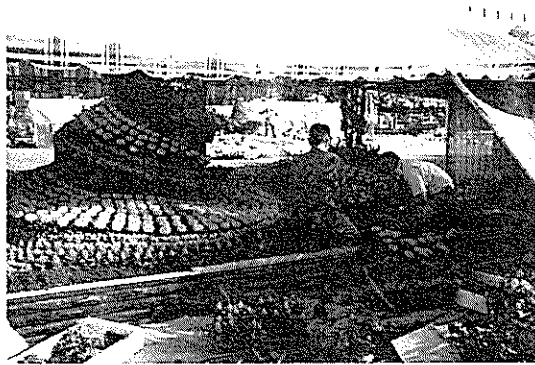
大通花壇の時代

大通公園の花壇は、市民だけでなく、札幌を訪れるたくさんの観光客にも親しまれている。特に、三丁目にかけて、芝生やベンチでくつろぐ市民の間で、奇抜で見ごたえのある花壇を背景に記念写真を撮る姿は、既に札幌の風物詩として定着していると思われる。

こんな大通の花壇がどのようにして作られ、どのように変化してきたか、簡単に振り返りながら、その果たした役割を見つめ直してみよう。



大正7年の北海道帝国大学農科大学附属植物園



テントの下で行われる夏花壇の植え込み風景

大通の歴史をひも解いてみると、火防線としての極めて初期の一時期を除いて、ある程度修景的に維持・管理されていたことが、古い写真などからも窺うことが出来る。

大正五年には、市（区）の委嘱を受け、北大の前川徳次郎氏の下で花壇が作られたことが記録に残されており、大正七年に札幌に初めて訪れた原秀雄氏（元植物園主任、前花壇推進組合長）は、花を使った模様花壇に見とれたと回想している。

しかし、何といっても現在の大通を特徴づけているのは、民間の業者の集まりである花壇推進組合が造成している五〇の花壇（通称コンクール花壇、以下同）の存在であろう。この花壇は、戦後荒廃していた大通を何とかしようと、当時の植物園主任であった石田文三郎氏が市内の花関係の業者に呼びかけ、昭和二十七年に一二社で組合を作り、花壇の造成を始めたのが出発点となっている。

当初は植栽する材料にも事欠き、戦争中にもわずかに残っていた宿根草を掘り上げて植え込んだり、切り花用の丈の高い草花を植えるなど、随分と苦労したといわれる。その後、使用出来る花の種類も増え、植え方を工夫して花壇としての体裁を整えて、今日のような姿になったものである。

この花壇の特徴として挙げておかなければならないのは、当初の一二社の中に、切り花を扱う花屋さん、鉢物を扱う園芸屋さん、植木を扱う造園屋さんの三つのグループがあり、これらの人達が石田氏の呼びかけに応え、札幌のまちに花を植えよう、広めようと力を合わせたことである。

一二社のうち、現在まで残っているのは六社、その後参加する業者が増え、現在五〇社にもなっているが、このうち八割以上は造園会社であり、花屋、園芸屋は極めて少数派となっている。このことは、花壇の内容の変化と密接に関係しているように思えてならない。

ここ二十年程、コンクール花壇の内容が華やかになる一方で、これは生きた植物を植えた花壇ではない、札幌の顔である大通花壇にはもっとおらかな花壇がふさわしく、箱庭みたいな花壇は似合わない、などといった批判も出てきている。

特に問題となっているのは七月下旬に植え替えが行われる夏花壇で、その作業風景を覗いてみると、テントの中で葉をむしり取り、あたかも花だけを挿しているかのような光景を目の当たりにすることがあり、いかに出来上がった花壇が見事で、賞をもらったとしても、植物を愛する物にとっては虚しくならざるを得ないだろう。

石田氏は、「いろいろな花をゴチャゴチャ使うのではなく、すっきり飾るべきだ」との考えであったといわれる。

これを大通の花壇の原点とするならば、当初から参

加している業者の中には今でも、デザインや賞のことよりも植物の生育のことを考え、株の間を取って植え込んでいる頑なまでの姿勢があるからこそ、大通を見習って市内に花が広まっていったのではないかと想像するのである。

当時を知る人はこぞって、大通の花壇は花に飢えた目には大した種類はなくても新鮮に素晴らしく見えたと思える。

そしてこれに習い、市内の各所に花を植えるようになり、ようやく平静さを取り戻した世相と、発展を続ける札幌のまちにうるおいを与えて行つたものであろう。

新しく導入されたり、長い期間花を咲かせ続ける植物の紹介、花と花の組み合わせの妙、限られた空間の中での無限の構成、花と様々なオブジェとの出会い……等々、大通の花壇が果たしてきた役割は、極めて大きいものがある。

しかし近年のコンクール花壇を見ると、かつて市民の間に与えてきたこれらのインパクトを少しでも持ち合わせているとは思えないのである。三×五の空間のなかだけでデザインを競い、他より少しでも目立つような奇抜さを追い求め、細かい模様を表現するために植物の生育を無視して花をつめ込み、あげくの果てに出来るだけ葉をむしり取って花だけが見えるように並べるといった、およそ花や緑にかかわる者からは想像も出来ない方向に走り出したまま、止まることすら出来ないでいる。

このような方向性の中で、本来北国の花壇にこそ相応わしい材料でありながら、狭い場所につめ込むことが出来なかつた材料は完全に、無視されてきた。再整備が行われている大通に出現したゼラニウムの花壇はひときわ鮮やかに芝生のグリーンに映えていたし、他にもヘリオトロップ、インパチエンス、イレシネ、ブルーサルビア、マーガレット、球根ベゴニアなど北国の夏を飾つてみたい素材はたくさん存在する。

大通はその場所柄、一般市民に加えて年間数百万とも推定される観光客が訪れる場所でもある。確かに現在のコンクール花壇がある程度人気のある存在であることは間違いないが、先の花の万博で見られたように、花による表現方法はますます多様化している現在、いつまでも三×五の空間内の表現に固執しては、時代の流れから大きく取り残されていく恐れはないだろうか。

今一度大通花壇の原点に戻るまでもなく、新しい時代においても常に斬新な話題を提供出来るような方向性を自ら求めることが出来るならば、その影響力、話題性からも、大通発の第二、第三の花のうねりが全市を包み込むことは、決して夢ではないように思えるのである。

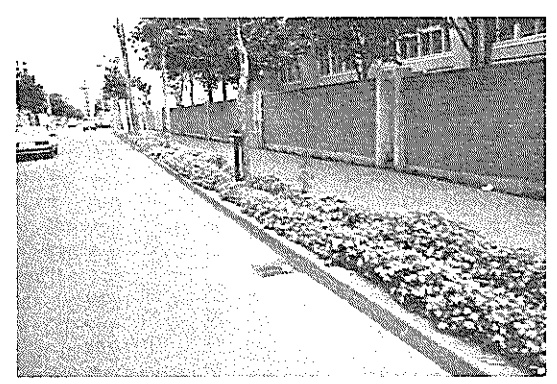
拡散の時代

花や緑は私たちにとって最も身近な存在でありながら、時として国と国とのやり取りの中で「ゆとり」の指標として取り上げられたり、政治・行政の主要課題となつたりする。そして現在、地方自治体の施策の中で、花や緑については、住民とのコンセンサスを得やすいものとして、近年急速にその比重が高まってきているといわれている。

札幌においても、平成二年度より始まった区の個性あるまちづくり事業の中で、多くの区で



毎年、町内会の人たちによって植ええられるペチュニア (西区・西野)



学校が周辺の花づくりに積極的に乗り出している (東区・北光小学校前)

場合を見ながら、今後の展望を探ってみよう。

とよひらHANA ISLAND (はなランド) 計画と名付けられたこの事業の目的は、おおむね次の通りである。

「自然に恵まれた緑多き地域に、花を添えることによりふるさと意識を育み、色豊かな美しい街づくりを推進する。また、家庭から会社、公共機関まで、花に囲まれ、花を愛でる住環境を形成する」

事業の進め方は、市独自で行うものと、民間団体の協賛・協力を求めて行うものの二つに大きく分かれているが、この事業が今までの花や緑に関する事業と多少趣を異にしているのは、個人のボランティアの協力を広く求めたところにあると思われる。

市では既に十年以上前から、歩道美化事業として、街路樹の植ますの花壇の造成を推進しており、花苗の助成、優良製作者の表彰等を行ってきた。

これは、町内会や老人クラブ等団体が対象となっており、これまでに事業に関わった人は相当数に上ることが推定される。

はなランド計画ではこれに加えて、花に興味があり、花の普及に積極的に取り組んでくれる人を「花恋人」として募集し、運動の大きな柱に据えている。これまでも花の好きな人で、自宅前にある街路樹の植ますの草を取り、庭の草花を株分けして植え込んだり、種を播いてきれいに花を咲かせている例は、あちこちで見ることが出来た。

こういった個人レベルの活動と、行政の側から行う事業とのドッキングが果たしてうまくいくのだろうか？

もちろん初年度の結果からあれこれ類推することは、誤謬を犯すことになるので慎まなければならぬことから、幾つかの結果だけを示しておくことにする。一つは、花恋人の募集に対して二、〇〇〇人以上の人が集まったことである。人口の1%近くの数字が多いか少ないか

花や緑に因んだテーマが設定されているのを見ても、この流れがますます身近なものであるというところが、強く認識されよう。

その中で特に花そのものをテーマに据えた豊平区

意見は分かれようが、町内会等の団体ではなく個人レベルでの参加であるだけに大変な数字であると考える。

もう一つの問題は、個々人の花への関わり方が当然ながらまちまちで、単に興味を持って人から、園芸に精通している人まで幅広い人材が集まり、それぞれの能力に合った活用が十分に図れなかったことが挙げられる。

このほか、担当者が意外に思ったことは、予想したほど老人の関心度が高くないことである。各種のサークル活動やゲートボールなど日々多忙に過ごしている人が多く、花づくりは老人の仕事といった常識は過去のものであると痛感させられた由。逆に世代を越えて花への関心が高まったと理解すべきなのだろうか。

とよひらはなランド計画は個人の力をどのようににまちづくりに生かしてゆけるか、という点でも、きっかけが花である点でも大変興味深い事業である。この種がやがて大きく花開くのを折りたい心境である。

このほか、開始してから数年経ち、様々な問題点も明らかになってきている事業にフラワーロード事業がある。南区の道道札幌支笏湖線や北区の屯田二番線などで行われ、年々その数が増えてきている。

北区の屯田二番線では、約二キロにわたって道の両側の植樹帯が整備され、地元意向でコスモスの種が播かれて、コスモス街道として知られていた。この事業は市が造成し、播種し、管理を行うもので、特に市民参加を求めるものとはなっていない。

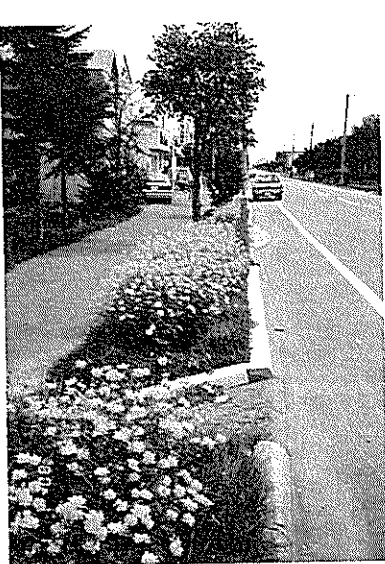
当初二年はコスモスが播かれ、美しいコスモス街道となったものの、コスモスの特性として花期がどうしても八月末以降と遅く、また草丈が一メートル以上と高く、交通事故を誘発しかねないなどの理由で、三年目の平成二年には同じ仲間ではあるが、草丈がより低く、花期の早いキバナコスモスに変えられることになった。

コスモスは丈夫で作りやすく、風情があることから最初に使われることが多いが、交通障害を引き起こしやすいために次第に使う場所が限られてくることが多い。

住民の意向は往々にして気まぐれでありながら、ある時には絶対的な存在ともなることがある。市独自の事業とはいえ、うまく地元との調整を図りながら模索してゆかなければならない難しさをこの事例は示しているといえるだろう。

このほか、全市的に花に関する事業が展開していくにつれ問題になっていくのが、花の種類であるといわれる。

つまり毎年植え込まなければならぬ花苗では膨大な数が必要となる。一度植えると毎年咲いてくれる宿根草



コスモスからキバナコスモスに変更された屯田二番線

は、花が咲く時期が極めて短い。種を播いて作れる一年草は間引きや雑草取



植樹帯に植栽された宿根草一庭先から株分けされた

りに手間がかかる……など、どれも一長一短で、担当者の頭を悩ませる原因となっている。

花が札幌のまちに姿を見せてから約一〇〇年。家庭レベルではある程度まで行き渡ったかに見えるけれども、それが一つの風景を作り出すには至っていない。

公共的なレベルでも、点としての公園から線としての道路美化によりやく取り組み始めたばかりで、面的な広がりには程遠いのが現状である。

しかし様々な場所、場面で花に関わる人が増えていくことは確実であり、周囲に花が増えてゆくことが私たちの生活・意識にどのような変化を及ぼすかを見極めながら、一つ一つ問題を解決してゆけば、美しく花のあふれるまちとなることも決して夢ではないような気がするのである。

さっぽろ文庫 56

花ある風景

札幌市教育委員会 編

1991年(H3)3月 発行